

【特集：廣野喜幸先生ご退職記念】

## 知らないことが多すぎて — 雑学連環あるいはライオンのたてがみ

廣野 喜幸<sup>1</sup>

大学院では昆虫を対象にした進化生態学を専攻することにした。シロアリの研究で理学博士なる称号もいただいたのだから、昆虫に関する知識は一般のみなさんより多く持っているはずである。(そうでないと悲しい。)だが、ステイブ・ニコルズの『虫・全史』を紐解くと、知らないことがあるわあるわ。世界ってほんとうに広いな、と思う。世界ってほんとうに凄いな、とも思う。

生態学徒時代、山口大学に蚊の脳を手術できる先生がいるときいたことがある。仰天した。私などは体長約2センチメートルのオオシロアリ (*Hodotermopsis sjostedti*) を解剖できるようになるまでに四苦八苦しただけなのに！

さっそく脱線。Wikipedia でオオシロアリの項目を覗くと、生態の項目にこう記されている。「幼虫は初齢から6齢まであり、7齢以降の未分化の個体が擬職蟻である。この擬職蟻の一部が、脱皮を経て兵隊蟻やニンフへと分化する。また、擬職蟻の脱皮は必ずしも他のカーストへの分化を伴うものではなく、擬職蟻が擬職蟻へと脱皮する場合が多い。このカースト分化を伴わない脱皮は静止脱皮と呼ばれる。また、ニンフが擬職蟻へと逆戻りする脱皮も知られており、退行脱皮と呼ばれる。」もちろん、静止脱皮や退行脱皮という現象自体はとっくの昔に知られていたけれども、オオシロアリの若虫、つまり働きシロアリ（擬職蟻）には7齢あること、7齢の働きシロアリがほぼ同じ大きさを保ちながら脱皮したり——昆虫の若虫・幼虫の脱皮は大きくなる際に起こるとというのが「一般常識」というものだろう！——、前兵隊シロアリを経て兵隊シロアリになったり、翅芽をもつニンフになったり（ニンフがもう1回、進行性脱皮——退行脱皮ではなく——を遂げると晴れて羽シロアリになる。）あるいは、ニンフの中にもとの働きシロアリに戻る個体がいったりと、7齢の働きシロアリはかなり融通無碍な潜在能力をもっている（←この性質があるからこそ、今後の研究を

1 東京大学大学院総合文化研究科元教授。

期待してよいという見通しを立てることができた)。これを明らかにしたのが私である<sup>2</sup>。Wikipedia の記述は、私の修士論文 (廣野 1985) に基づく (はずだ)。

脱線は続く。私の修士論文のタイトルでは *Hodotermopsis japonica* となっているが、これは *Hodotermopsis sjostedti* と同種である。以前は別種扱いであったが (松本ほか 1990)、その後同種とされたので、国際動物命名規約により、それ以前に記載がすまされていた *H. sjostedti* が学名となる。スウェーデンのストックホルム大学の動物学者であったホルムグレン (Nils Frithiof Holmgren 1877-1954) は、研究者人生の前半をシロアリ研究に、後半を昆虫の脳の研究に捧げた。*H. sjostedti* はホルムグレンによって、ベトナム北部に位置するトンキンの Mauson 山から得られた標本に対して、1911 年に与えられた名前である (Holmgren 1911)<sup>3</sup>。

東京帝国大学動物学教室第 5 代教授 (1901-1924 年) をつとめたのが渡瀬庄三郎 (1862-1929) である<sup>4</sup>。渡瀬は長く細胞学的研究に携わった後、マクロレ

---

2 大した業績ではない。

3 種小名が *sjostedti* であるのは、やはりスウェーデンのシロアリ学者であり、ホルムグレンの先達シェーステット (Bror Yngve Sjostedt 1868-1948) 教授に捧げられたからである。詳細は存知あげませんが、シロアリ研究の手ほどきを受けるなど、何かお世話になっていたのでしょうか。

4 初代教授 (1878 年 8 月 - 1879 年 8 月) は、大森貝塚で有名な言わずとしれたモース (Edward Sylvester Morse 1838-1925)。第 2 代教授 (1879-1881 年) はホイットマン (Charles Otis Whitman 1842-1910)。そして、第 3 代教授 (1881-1909 年) はミツクリサメ (*Mitsukurina owstoni*) という和名にその名を残す箕作佳吉 (1858-1909)。命名は、発見者から贈られていた標本を、三崎臨海実験所長であった箕作が魚類学者ジョルダン (David Starr Jordan 1851-1931) に鑑定を頼んだ経緯による。ジョルダンは初代教授の有力候補であった。学者一族出身の箕作については、玉木 (1998) に詳しい。箕作がはじめて動物学の手ほどきを受けたのはイエール大学のシェフィールド科学学校であり、ダイオウイカ研究の権威ヴェリル (Addison Emery Verrill 1839-1926) と甲殻類の研究者スミス (Sidney Irving Smith 1843-1926) からであった。モース・ホイットマン・ヴェリル・スミスは全員、アメリカ合衆国における動物学の創始者ともいえるアガシー (Jean Louis Rodolphe Agassiz 1807-1873) に学んだことが研究の端緒となった人たちである。要するに日本の動物学はアメリカ合衆国のアガシーの学統のもとで開始された。この時期のアメリカ合衆国の動物学者をあげれば、まずアガシー門下とも言えるので、当然と言えば当然なのだが。アガシーは氷河期時代があったことの実見者として有名である。これについて、ボウルズ (2006) などを参照。もちろんこれは大雑把すぎるの把握であり、ドイツの寄生虫学の泰斗ロイカルト (Karl Georg Friedrich Rudolf Leuckart 1822-1898) も多大な影響力を発揮し、ホイットマンはその信奉者になっていたため、ドイツの学統も流れ込んでいた。第 4 代教授 (1886-1921 年) が、日本鳥学会の創設者の一人であった飯島魁 (1861-1921) になる。飯島は第 1 回卒業生であり、教室出身の初の教授となっ

ベルに関心を移し、生物地理学における渡瀬線（トカラ海峡）を提唱するなどの業績を残した。アメリカザリガニやウシガエルを輸入し、また沖縄島へマンガスを移入するなど、今からすると微妙な行為を積極的に推進した人物でもあった。箕作や飯島とは異なり、昆虫にも興味を示し、シロアリの研究にも取り組んだ。日本におけるシロアリ研究の先駆者である。ということは、私の大先輩である。その渡瀬が1909年に *H. sjostedti* によく似たシロアリを奄美大島で採集した。生息地が離れていることもあり、ホルムグレンは別種と判定した (Holmgren 1912)。これが *H. japonica* である<sup>5</sup>。ただし、ホルムグレン自身が、*H. sjostedti* と同種である可能性を仄めかしていた。

決着がつかないまま70年ほどが過ぎたが、その間、何種かの新種が記載され、*Hodotermopsis* 属のシロアリ種は増えていく。1983年には、国立科学博物館の化石研究の第一人者藤山家徳が、岩手県雫石から発見された翅の化石を *Hodotermopsis* 属 (*H. iwatensis*) と同定した (Fujiyama 1983)。私がシロアリの研究を開始したのは1983年であり、その時点では現存種2種、化石種1種という理解であった。私が修士号を得たあたりから、中国でシロアリ研究が盛んになる。(ついでに言えば、多様な新種の恐竜も中国で陸続と見つかっていく。) 平正明 (広東省昆虫研究所) や朱世模 (中国科学院昆明動物研究所)、黄复生 (中国科学院動物研究所) といったシロアリ研究者たちによって、*H. lianshanensis* (1986年)・*H. orientalis*・*H. yui* (以上、1988年)・*H. dimorphus*・*H. fanjingshanensis* (以上、1991年) と、5年のあいだに5種が新種として報告された。かくして、現生種7種化石種1種の計8種にまで増えていった。

この「増殖過程」は、しかし、「減衰過程」を併走させていた。黄复生・季桂祥・朱世模 [編] (1989) 『中国白蟻分類及生物学』 (北京天則出版社) は、*H. japonica* を *H. sjostedti* のシノニムだと断じた。当時、シロアリ分類に形態だけではなく化学物質の観点からも切り込んでいた気鋭の研究者竹松葉子も同じ結論に達した (Takematsu 1996)。ベトナムと日本という離れた場所から得られ

---

た。なお、飯島はホイットマンの指導下、渡瀬は箕作のもとで卒業研究に励んでいる。

5 ホルムグレンによる記載名は *Hodotermopsis japonicus* だが、これはホルムグレンの凡ミスで、命名規約上はラテン語として文法上の性を一致させねばならないので、正式な学名は *Hodotermopsis japonica* が使用されなければならない。

た標本に——あるいは同種かもしれないと疑われたほどのわずかな—— 地理的変異が見いだされたわけだが、中国で見つかった「新種」たちをそのあいだに並べてみると、連続した変異という図柄が浮かび上がり、すべての既知の現生種は同種とすべきということに落ち着いた（黄ほか 2000）。現生種 7 種は *H. sjostedti* にまとめられたのである。

この事例から科学史・科学論上考察すべきことは何点かある。ここでは、現在研究者共同体が従っている知識（*H. japonica* ほかの 7 種はすべて *Hodotermopsis sjostedti* のシノニムである）は、査読論文ではなく専門書という書籍に記述されている情報に基づくことのみを指摘しておきたい。査読論文を読破するだけでは、研究者共同体がもつ知識体系に十分迫ることはできない<sup>6</sup>。エピステモロジーの創始者バシュラール（Gaston Bachelard 1884-1962）の著作を紐解くと、こんなものが史料になるのかと驚く。

日本史研究では同時代史料が 1 級の情報源になる。そこで、藤原道長（966-1028）の『御堂関白記』（998 - 1021 年）や山科言継（1507-1579）の『言継卿記』（1527 - 1576 年）といった貴人たちの日記類の一覧が作成されていて、研究対象に関する同時代の情報へのアクセスが容易にできるようになっている。50 年近くに及ぶ『言継卿記』は戦国時代に関する貴重な情報源であり、また自らの病歴・治療歴も記されている医学史の 1 級史料でもある。そして、それは将棋の成立過程を調べる際にも活用された「すぐれもの」である<sup>7</sup>。

「同時代史料に基づくべし」は、歴史研究の鉄則である。とはいえ、そもそも、日記類の筆者は公表を前提していないことが普通である。推敲がなされていないので、文法の間違いや誤字脱字も多い。解読不明、意味不明な箇所も多い困難さを抱えている。また、同時代史料を文献に限ると、ときに視野狭窄を起こし、危うさを伴う。トランプ大統領は思いも寄らぬ奇手を連発し、「良識層」からの反発を買う（が、「庶民層」からの喝采を浴びもする）。織田信長（1534-1582）

6 論文を読む作業にのみ埋没してしまうのは、かえって研究の質を下げかねないので、要注意！

7 『言継卿記』からは、貴族山科言継が誰と将棋を指し、囲碁を打っているかがわかる。貴族間だけではなく、武家や僧侶などが相手になっており、普及範囲を推定することができたりする（増川 1995）。

もここまでやるのかと震撼させるほど、ドラスティックな手に出る。その一つが、敵対する比叡山延暦寺の焼き討ち（1571年）だろう。『言継卿記』はこう記す。「織田弾正正忠、暁天より上坂本を破られ火を放つ。次いで、日吉社残らず。山上東塔、西塔、無童子残らず火を放つ。山衆、悉く討死にすと云々」。女官の日記『お湯殿の上の日記』にはこうある。「のふなかのほりて、ひゑの山、さかもとみなみなのからずはうかする。そのほか山王・八王子などまでやく。」これらの記述から、従来、全山の諸堂が紅蓮の炎に包まれ、大殺戮がくりひろげられたとのイメージのもとで、史実が認定されていた。だが、滋賀県教育委員会の発掘調査によると、焼土層が認められず、同委員会は、先のイメージは誇張であり、実際は山火事程度だったと推定している。山科言継が記したのは伝聞推定だったのであろう。同時代史料だからといって盲信するのは危険である。「当事者の書いた古文書・古記録はたしかに第1級の史料で、そうした史料に依拠して研究が進められなければならないことは言うまでもないが、こうした落とし穴もあることは肝に銘じておく必要がある。」（小和田 2003, 15）歴史研究は慎重な史料批判を経た上で、総合的な判断をしなければならない。また、悩ましいのは、その時代の常識であって、かつ私たちの常識でないことは明示されないことである。

藤原行成（972-1028）などの能筆家の直筆は、内容を差し置き、字そのものが鑑賞される対象となった。そのため、一部を切り取り、額装され、愛でられた。結果的に、文章が散逸する。切り取られた断片は「古筆切」と言われるが、散逸した古筆切から元の文章を再現する方法を編み出し、古筆学なる学問体系を作り上げたのが、日本学士院賞に輝く小松茂美先生（1925-2010）である<sup>8</sup>。一つの学問体系を築くなんて、なんてすばらしい<sup>9</sup>。小松先生は最後に後白河法皇（1127-1192）研究に取り組んだ（小松 2012）。残念ながら、未完に終わったが。小松先生はまず研究のための基礎資料を作成された。文献を博搜し（文字

8 実際警咳に接し、ご指導いただいた方は、なかなか呼び捨てにできないものです。そうした方には、先生をつけることになりました。

9 私もそんな研究成果をあげたかったな。

通り博搜である)、後白河法皇の日々の行動を洗い出したのである(小松・前田 2012a, 2012b)。

私は常々院生のみなさんにお伝えしている。研究の準備として、(1) 年表をつくるように、(2) アクターをすべて洗い出すように<sup>10</sup>。このお手本が小松茂美先生による『後白河法皇日録』である。評伝をものするにあたって、これほどまでに詳細に行動を掌握しておかなければならないものなのか! 一度、実物を御覧あれ。1127年9月11日亥刻(午後2時頃)の誕生から、1192年3月13日寅刻(午前4時頃)の逝去に至るまでの生涯が、5~798頁にかけて、克明に綴られる。誕生した日も亡くなった日も、晴れであったことまでが分かるようになっている。ご恵贈いただいたとき、私は自らの目標設定の低さを恥じ入った。小松先生の学問に対する熱意・熱量、打ち込み方といったら。吉村(2008)を手にとってみていただきたい。「満身これ学究」の学者がいたことを知るだけでも、損はないだろう<sup>11</sup>。

もとい。オオシロアリの働きシロアリは女王・王シロアリがいるあいだは、オス・メスとも生殖腺を発達させず、弟妹たちをせっせと育て続ける。ところが女王・王シロアリを除去すると、生殖腺が発達し、子どもを産むようになる。(こうした個体を副女王・副王と呼ぶ。)女王・王シロアリの存在が働きシロアリの生殖腺の発達を阻害しているのだろう。この生理学的機構の解明が、シロアリの社会進化を説き明かす1つの鍵になるのではないか——これが、松本忠夫先生(私の指導教官)の読みであった。そこで私はせっせとシロアリを顕微鏡下で解剖し、生殖腺の発達具合をチェックしていた次第である。シロアリはゴキブリから進化した。DNAを用いて系統樹を作成すると、キゴキブリ類とシロアリ類は単系統群をなす(=同一分類群に属す)<sup>12</sup>。そこで、松本研の他の

10 なかなか聞き入れていただけませんが……。

11 (ただし、中和剤も少々。小松先生の学問にかかる情熱と精力の注ぎ方はあくまで目標である。そうたやすく実現できる境地でもない。)ちなみに、科学史家として、医学の泰斗ベルナール(Claude Bernard 1813-1878)を研究し、ベルナールの基本は器官連関-機能連関説だと喝破し、また、生命倫理学者として、脳死・臓器移植や反延命主義を論難した小松美彦さんは、小松茂美先生のご子息である。

12 DNA分析による単系統性の支持は後年のことになる。他の分析からすでにそのように指摘

メンバーはクチキゴキブリなどを研究していた。何人かいるメンバーの中には、顕微鏡下の解剖はついにできずに終わる人もいる。

逆さ眼鏡という装置がある。それをかけると上下が、あるいは左右が反転してみえる。上にあると思えばしても、触れない。実際は下にあるのだから当然である。知覚像と行動の不協和に吐き気をもよおす人もいるという。ところが1～2週間ほど経つと、協和し始める。上下が一致するような知覚像に変わるのだそう。顕微鏡下の解剖もこれに近いところがある。知覚像と手の動きの不協和がなかなか解消しない。ついに解消しないと顕微鏡下の解剖ができないまま、修士課程を終えて社会に巣立つことになる<sup>13</sup>。

副女王は女王ほど生殖腺を発達させない。産む子どもの数が少ない。その代わりなのか、何頭もの副女王が一つのコロニーに現れる(場合がある)。コロニー自体の個体数増加率は、女王がいたときとさほど変わらない。などといったことが分かったら、学会で発表する。私の院生時代、学会発表の3週間ほど前には実験結果が出そろっていなければならなかった。ロットリングで図を描き、それを写真にとり、本郷の生協にあった業者さんにスライド化をお願いし、10枚前後のスライドを鞆に放り込んで、電車に乗り込む。練習で先生から訂正の指示があると、やりなおしの憂き目に遭う。普通の現像は、資金節約のため、自分で行った。写真についての知識を一通り得ておく必要があった。

加納隆至先生は、京大が誇る霊長類学の主要研究者のお一人で、それまでよく知られていなかったボノボ研究を日本で推進した功労者である。瑞宝中綬章を受けたのも、むべなるかな。院生の頃の国際会議かなんかで、加納先生の発表を聞いたことがある。ところが、加納先生は開口一番、スライドをすべて忘れてきましたと謝罪なされた。図表なしだと理解が著しく阻害される。正直言って、加納先生の話は少しも理解できないで終わった。かつての学会発表はこうしたリスクが常につきまとっていた<sup>14</sup>。

---

されていた。

13 顕微鏡下の解剖など、立派な社会人の必要条件ではないのだから、それでいいのだ。

14 今はデジカメでとり、コピー&ペーストすればいいだけだから、楽ちんである。普通の講演なら、新幹線の中で直前までパワーポイントで修正できる。いい世の中になりましたな。

西田利貞先生（1941-2011）と加納先生は大学院時代の同期生のはずである。私の院生時代、西田さんは東京大学の助教授だったから、正規の講義を受ける機会に恵まれた。そのころ、東京大学は上野動物園となんらかの提携関係があり、西田さんに連れられて授業の一環として上野動物園へ行くと無料で入園できた。実物の霊長類を見ながら、西田さん自身の解説を直接聞いたのは、今から思うと実に贅沢な時間であった（当時は気づきもしなかったが）。西田さんは煙草をすいながら解説してくれた。そして、煙草を手すりに押しつけ、しっかりと火を消し、携帯灰皿に吸い殻をいれる。その頃は今のような合成樹脂の携帯灰皿は一般的でなく、金属製の携帯灰皿を労を厭わずわざわざ持ち歩くのは、今でいう「環境スマート」な行為なのだが、西田さんが優雅に環境スマートな所作に及ぶシーンは、今でも鮮やかに思い出すことができる<sup>15</sup>。

もとい。そのかみ、理系で研究生を送るためには、身につけなければならないスキルが多種あった。製図・写真・包埋作業・電子顕微鏡などなど……。社会科学系だと、アンケート法や参与観察法などのスキルが求められるが、種類数は理系よりも少ないのではないだろうか。人文系は基本的に、資料を読み、考え、文章を記す3つの作業に習熟すればよい<sup>16</sup>。

人文系では、資料の読解に多くの時間を費やさなければならない。私も本を読むことに多大な時間を割いてきた。石浦章一先生は大学院の大先輩（10歳年上）で、アイディアマンとして有名である。啓蒙書も多数世に送っている活動的な科学コミュニケーターでもいらっしゃる。今堀和友先生（1920-2016）の研究室出身で、オートファジーでノーベル賞を得た大隅良典先生の弟弟子にあたる。石浦先生は、かつては推理小説が好きだったが、研究に差し障ると考え、あるときから一切読まないようにしたという。耳に痛い話だ。私は読書の大半を、研究の息抜きと称して、推理小説にあてているからである。石浦さんのように、好きなものを絶つ規律を厳しく自分に課していたら、もうちょっと

15 授業後は当然動物見学を楽しみました。

16 楽ちゃん、楽ちゃん。え、そうでもない？！

ましに研究者になれたのかもしれない<sup>17</sup>。

今堀先生は三菱化成生命科学研究所所長を務められた（1986-1995年）。三菱化成生命科学研究所の特徴は、生命倫理や科学史に取り組む社会生命科学研究室が存在したことである。自然科学・医学系の研究所では先進的な試みであった。同研究室で活躍されたのが、中村桂子・米本昌平両先生であった。当時のことを知りたくて、今堀先生や中村先生たちにインタビューをお願いしたことがある（香川・小松 2014）<sup>18</sup>。本筋とは関係ないところで、「おおっ」と感じ入った今堀先生の話は、留学時代についてであった。留学中に卒然として研究とは何かを悟ったそうである。それ以降、どんなテーマであっても、成果があがらないなどということはいずれなくなったという。「どんなテーマ」は字義通りどんなテーマを意味する。今堀先生は生化学がご専門だが、物理であれ何であれ、どんなテーマが与えられても成果をあげる自信があるという話は驚異であった。あやかりたかったが、これは実際一緒に研究しないと伝えられない類いの暗黙知であるらしい。大隅先生や石浦先生はこうした暗黙知を会得したのだろう。

もとい。推理小説の効用もなくはない。論文は要するに推理小説のように書けばいいのだ。伏線を周到に用意して、最後に鮮やかに回収する——と、こうアドバイスを院生諸氏に伝えても、きょとんとしている。最初から犯人をばらし、その後はただそれを漫然と繰り返すだけで、論証などありゃしない。一向に芸を見せてくださらない。何とかしてよ、といってもきょとんとしている。この「きょとんぶり」は何なのだ。この手応えのなさ、なぜなのか。なぜだろう、なぜかしら？ あるとき、はっと気づいた。「院生さんは推理小説読まないんだ！ え〜」。自分が読んでいるからといっても、他の人もそうだと考えるのは奢りにほかならない。自省しております。

それで一連のなぞが解けました。アドバイスを院生さんにする。無視される。

---

17 いや、それは過大な自己評価で、推理小説を断念しても、たいした研究者にはなれなかつただろうな。だとすると、読んで楽しい時間を多く持つことができたのは、正解とすべきかもしれません。

18 米本さんからは、やんわりと断られました。

あれ、通じなかったかなと思い、念のため、もう一回アドバイスしてみる。再度無視される。あれー。この無視はどういうことなのだろう？ だめなアドバイス、不要なアドバイスだと認定しているが、私と事を構えたくないため、やんわりとした拒絶をこの無視は意味しているのだろうか。そうではないらしい。私のアドバイスは、私の読書体験に基づく。そして、かつての院生さんは、年の差があるのだから量は異なるにせよ、私とほぼ同じ読書傾向をもっていた。つまり、「パラダイム」を共有していた。今は、していない。だから、私のアドバイスは意味不明命題としてスルーされる、という次第なのだろう。

プラットフォームで廣松渉先生をお見かけする。駒場東大前駅・渋谷駅間のわずかなあいだ、雑談する。もちろん、廣松先生はマルクス哲学の泰斗。<うわっ、理解が及ばない話だ。う～ん、笑ってごまかすか。う～ん、それも見破られるのがおちか。> 「先生、すみません、私はそのあたり、ほとんど把握できていないのですが……。」 「ええ、そうなんですか。あなたが生態学者であることはわかっているのです、誰でも知っているはずの話をつたったのですけどもねえ。生態学者であれ何とか学者であれ、大学生時分にマルクスの『フォイエルバッハに関するテーゼ』くらい、一度は目を通す機会があったはずですよ。それが教養ってもんじゃないでしょうか。ましてあなたは教養学士じゃないですか。」 そりゃ、有名な第11テーゼくらいは聞いたことがあります。「哲学者は世界をさまざまに解釈してきた。大事なものは、世界を変革することである。」しかし、第1～第10までのテーゼはまったく存知あげません。う～ん、次ぎにお会いする機会に備えて、エンゲルスでも読んで「教養」なるものを身につけておくか。

う～ん、今の院生さんは、そんな発想しないのだろうか。自分の研究テーマに関係ないものなど、目を通して暇などありません！ タイパが悪いこと甚だしいじゃ、ありませんか！ 成果主義の時代だと、こう思うようになったとしてもまあ不思議ではない。人文系の作業の基本は、研究対象の資料の読解である。だがしかし、アプローチ方法も研ぎ澄ましておかなければならない。両者が相俟って、質の高い研究が得られる。資料を読み込めば、切れ味のよいアプローチ方法が自ずから身につくというものでもない。アプローチ方法を研

磨するためには、研究対象の資料とはまた別の、格闘的読書という経験の厚みが必要になる。教養重視時代は、教養を身につけるという名目で、そうした経験の厚みをもつ方向に誘われた。

生態学徒時代、「ビーカー洗い1年、よいしょ3年」なる「格言」を耳にしたことがある。ビーカーがきれいに洗えていると、水がすーっと落ちていく。よく洗えていないと微小なゴミがあり、そこで水が停滞してしまう。1年くらい洗い続けて、その境地に至る。また、阿るべく先輩の研究を褒めようとしても<sup>19</sup>、頓珍漢な賛辞はかえってシラケさせるだけである。研究の文脈をしっかりと押さえ、まさに褒めるべき点を適切に褒められるようになるには3年くらいかかる。研究の文脈＝パラダイムを先輩と共有できるようになれば、晴れて研究者共同体の一員である。理系ではまだまだそのような作法が残っている。師弟間でパラダイムを共有しないようになった人文系は、師弟関係の再構築が求められている、とは言えまいか。怒濤の時代を前に、研究者共同体を抜け出す私は、再構築の労苦をせずすみ安堵感に心地よく揺蕩っている。

もとい。推理小説で一番好きなのは、チャンドラー (Raymond Thornton Chandler 1888-1959) のフィリップ・マーロウものである。清水俊二 (1906-1988) 訳で親しんだが、かの村上春樹さんが新訳を出してくれた。多忙にかまけて村上訳はまだ一冊も読めていない。味わいがどのように違っているのか、定年後の楽しみにとってある<sup>20</sup>。ちなみに、次ぎに気に入っているのは、エルキンズ (Aaron Elkins) の形質人類学者ギデオン・オリヴァーのシリーズである。今も再読に励んでいるところだ。

進化論を本格的に論じようとする人が、ダーウィン (Charles Darwin 1809 - 1872) の『種の起源』を読んでいないとしたら、話にならない<sup>21</sup>。同様に、

19 そんな院生はもういないか。

20 もう一つ楽しみにとってあるのは、志ん朝のDVD全集である。

21 私は飯田隆さんの『言語哲学大全』全4巻を読破していない。第1巻および第3巻で興味のある部分を読んだのみである。と、こういったら、野矢茂樹さんから、「だとしたら、廣野さんは言語哲学については何も発言してはいけなんでしょうね」と釘を刺されました。当時、言語哲学をテーマにする院生さんはあまりいなかったので問題はなかったが、言語哲学者藤川直也先生が同僚になってからは状況が違ってきた。言語哲学で修士論文を書かれたみなさん、私（ほ

ミステリー好きと言いながら、ホームズ (William Sherlock Holmes 1854-1957) の冒険譚を読破していないとしたら、話にならない<sup>22</sup>。ダーウィンが、かの『種の起源』を出版したのが50歳のとき、すなわち1859年のことになる。同年生まれのコナン・ドイル<sup>23</sup>は、シャーロック・ホームズを自分より5歳年上に設定した。このように、ダーウィンとドイルの活躍時期には半世紀の差がある<sup>24</sup>。

ホームズとダーウィンはともに人気者だ。かつてダーウィンを論じる書籍が山をなして出版されるさまは「ダーウィン産業」(Ruse 1974)と称せられたが、この言い方に倣うと「ホームズ産業」も立派に成立している。後者に関するやや硬めのラインアップには、動物記号論で有名なシービオク (Thomas Albert Sebeok 1920-2001) とやはり記号学者であるユミカー＝シービオク (Donna Jean

---

とんど) コメントしなかったのは、このような次第からです。悪しからず。

22 私ですか？ 当然読んでますよ。シャーロキアンは自称できませんけれども。というのも、新潮文庫版・光文社文庫版・創元推理文庫版・ハヤカワ文庫版・河出文庫版・ちくま文庫版総計50～60冊ほどを揃えるなどといった境地には至っていないから。あるいは、ミステリーの巨匠カー (John Dickson Carr 1906-1977) と一番下の息子アドリアン・コナン・ドイル (Adrian Malcolm Conan Doyle 1910-1970) による『シャーロック・ホームズの功績』やトムスン (June Valerie Thomson 1930-2022) の『シャーロック・ホームズの秘密ファイル』『シャーロック・ホームズのクロニクル』『シャーロック・ホームズのジャーナル』『シャーロック・ホームズのドキュメント』といったパスティーシュ群も読まずにはいられないほどの、病膏肓状態でもないからです。

23 息子の名前がアドリアン・コナン・ドイルであることから想像がつくように、コナン・ドイルで一つの(複合)姓になります。コナンはミドル・ネームではありません。書店にいて、文庫の棚を眺めると、カ行ではなく、タ行で配架されていることが多いですね。こうるさいことを言えば、誤りです。でも、シャーロキアン周辺では、ドイルだけで済ませてよいというお約束になっています。本稿でもそれに従っています。書店の配置が無知によるのか、書店もシャーロキアンなのかは不明です。まあ、買う人がタ行で探すので、それに応えているというところが正解でしょうか。

24 『タイム』誌で役員も務めたジャーナリストのベアリング＝グールドは、諸文献を渉獵して、ホームズの実に詳細な伝記を作成した(ベアリング＝グールド1987)。本稿の、各事件が起こった年やホームズたちの生没年は、これによっている。同書によれば、ホームズは103歳まで、次兄のマイクロフト (Microft Holms 1847-1946) は99歳まで生きた。長命な兄弟である。(知ってました?) 長兄のシェリンフォード (Sherringford Holmes 1845-?) は、どうだったのでしょか。医師ワトソン (John Hamish Watson 1852-1929)の方が、むしろ短命であった。まあ、当時のことを思えば、ワトソンが平均的で、シャーロックやマイクロフトが異様に長生きだったということなのだろう。なぜ長生きだったかについては、次註に譲りましょう。

Umiker-Sebeok 1946-) 夫妻による『シャーロック・ホームズの記号論』、哲学者内井惣七の『シャーロック・ホームズの推理学』、経済学者太田隆『シャーロック・ホームズの経済学』、科学者オブライエンの『科学探偵 シャーロック・ホームズ』等々があげられる。

ホームズと言えば、ベイカー街 221B。そこで同居者であり相棒であるワトソンとともに捜査に取り組む。やがてワトソンが結婚し、ベイカー街 221B を立ち去る。そして、年老いたホームズはサセックス州サウス・ダウンズの英仏海峡を臨む地に隠棲し、家政婦とミツバチとともに暮らしはじめる。ベアリング＝グールド (William Stuart Baring-Gould 1913-1967) によると、この隠棲は 1903 年 11 月、ホームズが 49 歳のときのことである。ホームズは養蜂に力を入れていたらしく、「暇にまかせて書いた晩年の最大著作」である『实用養蜂便覧 付・女王蜂の分封に関する諸観察』まで書き上げている (ドイル 1953c, 352)<sup>25</sup>。引退後に起こった事件を扱う、それゆえワトソンが登場しない数少ない短編の一つで述べられているのが、1909 年 7 月に起こった「ライオンのたてがみ」(第 53 短編) 事件である<sup>26</sup>。

25 ホームズには他にも、『手の形態に与える職業の影響』(私家版、1886 年；『四つの署名』で言及される)、『探偵学のすべて』(1957 年) などの著書がある。後者は 103 歳の死を直前にしての著作である (ベアリング＝グールド 1987, 43; 397)。伊東俊太郎 (1930-2023) 先生は、92 歳で『人類史の精神革命——ソクラテス、孔子、ブッダ、イエスの生涯と思想』(中公選書、2022 年) を世に問うた。これは驚きだったが、ホームズはそれを上回る！ 論文には、「人間の耳の多様性に関して」(*The Anthropological Journal*, 15(8): 672ff. and 15(9):712-719. ; 「ボール箱」『最後の挨拶』)、「灰による各種タバコの鑑別法に関して——140 種類の葉巻タバコ、シガレット、パイプタバコの灰の分析」(『緋色の研究』、『四つの署名』、「ボスコム谷の惨劇」『冒険』)、「文献の年代考証に関して」(*British Antiquarian*, September, 1877 年；『バスカヴィル家の犬』)、「刺青に関するもの」(1878 年；「赤髪組合」『冒険』)、「足跡の見方に関して、ことに石こうを利用した足跡の保存法」(1878 年；『四つの署名』；フランソワ・ル・ヴィラル警部による仏訳あり)、160 種の暗号解読が記されたもの (1896 年；「踊る人形」『帰還』) などがある。ホームズはなぜ引退後の多くの時間をミツバチの飼育に充てたのか。ロイヤル・ゼリーに注目していたからだ (ベアリング＝グールド 1987, 398-399)。ホームズと兄マイクロフトの長命の秘密は、ロイヤル・ゼリーの研究成果によっていたのである。この成果は『实用養蜂便覧』に盛り込むことができず、別の書籍——刊行されたとしたら、1957 年以降の死後出版のはず——に結実したとされる。

26 短編の総数は 56。

ホームズ家の隣には——といっても広大な土地にぼつりぼつりと家屋があるだけだから、軒を接しているわけではなく、少し離れている——職業訓練校「ザ・ゲブルス」がある。ある日——渡瀬がオオシロアリを採集した年——、近くの海岸で、その理科教師マクファースンが、「ライオンのたてがみ」と一言残しながら、鞭で打たれたような痕を残して、奇妙な死に方をする。もちろんその犯人捜しが同短編のコアになる。（本稿は、このあたりからいわゆるネタバレの世界に突入する。これからの楽しみを台無しにしたくない方は、あらかじめ当該書籍を読了した上でお戻りいただくと幸いである。）

警察は数学教師マードックを逮捕したが、モード・ベラミー嬢を競い合う関係にあったからだ。が、ホームズの見るところ犯人ではない。周辺の人々はいずれも犯人ではない。さて、困った。「私の扱ったどの事件の記録を見ても、これほど自分の力の限界を知らされた場合はない……。」（ドイル 1953d, 348）この膠着状況の中で、マクファースンの犬が、まさにマクファースンが死んだ場所で死ぬ。さすがホームズ。犬の死をきっかけに、最初は「目の前にあることがわかっていながらどうしても手が届かないじれったさ」（同, 350）を感じる程度ではあったが、核心を捉えはじめ、ついに、「私がふとそれに思いあたったのは、急な坂を崖上まで登りつめたときだった。まるで稲妻のように、探し求めて得られないでいたものを思い出」す（同, 351）。そして、屋根裏部屋に駆け込むと、ぎっしりと詰まった本の中から、チョコレート色と銀に輝く装釘の本をとりだし、真相に思い当たる。

ホームズはマクファースンおよびその犬が死んだ場所で、水中をのぞきこみながら探索を続ける。「サイアネアだ！ サシアネア水母だ！ これが“ライオンのたてがみ”の正体です！」（同, 359）「こいつがさんざん悪いことをしたのです。」（同, 360）殺人事件ではなく、事故だったのだ。「犯人」は、学名 *Cyanea capillata*、標準和名キタユウレイクラゲ、英名 Lion's mane jellyfish（ライオンタテガミクラゲ）。「チョコレート色と銀に輝く装釘の本」とは、ウッドの『野外生活』である。

「ここに本があります」私は小さな一冊をとりあげていった。「この本の

おかげで、永遠のなぞになるところだったこの事件に、解決の手掛りを与えられたのです。有名な博物学者 J・G・ウッドの“野外生活”といいましてね、著者自身がこの怪物に刺されて、あわや命を落とすところだったので、きわめて詳しく書いてあります。学名をサイアネア・カピラタといひまして<sup>27</sup>、こいつはやられるとコブラへびにかまれたのと同様に生命の危険があるばかりか、はるかに痛いそうです。(同, 361)

キタユウレイクラゲもウッドも『野外生活』も、ドイルが創作した架空の存在ではない。キタユウレイクラゲは日本でも、まさに北の方に行けば観察できる。観察の機会がより多いのは、同属のユウレイクラゲ (*Cyanea nozakii*) だろう。周縁部が青白く見えるのが、幽霊なる命名の由来である。「周囲部ハ少シ青色ヲ帯ンデ見ユ ゆふれいくらげノ名ハ重ニコノ周囲部ノ色ヨリ来リタルモノナラン」(岸上 1901, 93)。ユウレイクラゲを記載したのは、岸上鎌吉 (1867-1929) である。岸上は、丘浅次郎 (1868-1944) の同期で、箕作門下、後に東京帝国大学農科大学水産学科第一講座の教授に 1908 年におさまった、水棲生物分類学の先駆である。第二講座教授は石川千代松 (1860-1935) であった。岸上は中国で客死した。種小名は調査時に世話になった、中国地方の素封家野崎続太郎 (1867-?) に献呈されたものである。近代動物分類の起点はリンネ (Carl von Linné 1707-1778) の『自然の体系 (第 10 版)』(1758 年) に掲載されている 4,236 種だが、キタユウレイクラゲはその中に名を連ねる「由緒正しき」クラゲである。だとすると、標準和名は、キタユウレイクラゲがユウレイクラゲ、ユウレイクラゲがミナミユウレイクラゲでよかったかもしれない。

オオシロアリやキタユウレイクラゲの学名からも分かるとおり、現在、諸生物の正式名称である学名は、属名および種小名という二語のラテン語によって示される。この二語式命名法を創案したのがリンネであった。それまで、種

---

27 こうるさいことを言うと、学名は *Cyanea capillata* である。サイアネア・カピラータは、学名のカタカタ書きであって、学名そのものではない。学名とは、アルファベットを用いて記されたラテン語でなければならないと命名規約で規定されている。

小名に相当するパートは数語の（語数は不定）、その生物を適切に特徴付ける形容句から成っていた。たとえば、アカシカ (*Cervus elaphus*) は、*Cervus cornibus ramosus teretibus incurvis*（枝分かれし、かつ内側に楕円形に湾曲した角をもつシカ）、カンナの原種の一つダンドク (*Canna indica*) は *Canna foliis ovatis utrinque acuminatis nervosis*（葉は卵形で両端が鋭くとがるカンナ）といった具合であった。この形容句をリンネは種正名と呼んだ。これだと、同様の特徴をもつ別種が知られた場合、学名をつけなおさなければならず、安定しない。リンネは当初、「属名+種正名」を正規の学名として、種小名を欄外に注記する形を取った（松永 1992）。しかし、「属名+種小名」システムは、当該生物種を特徴付ける役割から種小名のパートを解き放ち、記号化し、学名が安定する効用をもたらし、まもなく正規の学名として、「属名+種正名」システムに取って代わっていった。

1867年、第1回国際植物学会議がパリで開催され、植物に関する命名規約の議論が開始される。そして、ウィーンで開かれた第2回国際植物学会議(1905年)で、国際植物命名規約が採択された。なお、アメリカ合衆国はこの規約をよしとせず、国際植物命名規約が真の意味で国際的なものになるためには、ケンブリッジにおける第3回国際植物学会議(1930年)まで待たなければならなかった。また、1889年、パリで第1回国際動物学会議が開かれ、1901年には第5回国際動物学会議がベルリンで催される。そこで、『万国動物命名規約』が定められ、1905年に出版される。私たちは現在、二語式命名法に従って研究を進めている。二語式命名法で全面展開された初の分類体系が、植物では『植物の種』(1753年)、動物では『自然の体系(10版)』(1758年)<sup>28</sup>であった。そこで、両命名規約はそれぞれを近代分類体系の出発点と定めたのである(西村 1999, 32)。

ウッドとは John George Wood (1827-1889)、『野外生活』とは *Out of Doors*.

28 『自然の体系』は1735年に初版が刊行され、その後、1740年(2版・3版)・1744年(4版)・1747年(5版)・1748年(6版・7版)・1753年(8版)・1756年(9版)・1758年(10版)・1760年(11版)・1766年(12版)・1770年(13版)と順調に版をのばしていった。

(Longmans, Greene and Company. 1874) のことである。「十八世紀の中葉から十九世紀の六〇年代にかけてほぼ一世紀のあいだ、ユーラシア大陸の西端、西ヨーロッパと、その東端、日本とで、期せずして博物趣味の一大ブームが巻き起こり、社会全体がそれに沸いた。」(西村 1999, 9)「一八二〇年代から一八六〇年代にかけて……あらゆる社会階層を魅了したもっと根深く、もっと息長く不易の、博物学への熱狂というものがあつたのである。」(バーバー 1995, 17-18) かような博物学ブームの中で、現在までもっとも評価の高い書籍は、ホワイト (Gilbert White 1720-1793) 副牧師による『セルボーンの博物誌』(1789年) だろう。同書は晩年の刊行であり、ホワイトは名声を十分味わうことがかなわなかったが、当時から世評が高かった。「聖職者たちはみな『セルボーンの博物誌』のギルバート・ホワイトのひそみに倣って自分の教区の博物誌を一冊の本に纏めて出版したいという密かな思いを抱いていた。」(バーバー 1995, 18) 本職聖職者、副業博物学者という事例があまた存在した。そうした聖職者の中で、世俗的に最も成功したのが、聖バーソロミュー病院のチャプレンなどを務めたウッド師であった。

今日、ダーウィン産業もホームズ産業もはるかに上回るジャンルをなしているのが自己啓発本だろう。こんなに出版されていると選択コストが負担になり、どれも読む気になれないほどだ<sup>29</sup>。その淵源が、ダーウィンの『種の起源』と同じ年に出版された、スマイルズ (Samuel Smiles 1812-1904) の『自助論 (Self-Help)』である (スマイルズ 1981)。博物学の愛好は自己啓発の有力な手段だと位置づけられていた。同書は1年で2万冊ほど売れたという。これもたいしたものだが、博物学熱は自己啓発をはるかに凌駕していたらしい。なんと、ウッド師の『イギリスで普通に見られる生物たち』(1858) の販売数は1週間で10万冊 (!) であった。飛ぶように売れるとは、このことを言うだろう (アレン 1990, 225 ; バーバー 1995, 18)<sup>30</sup>。

ウッド師のことを、博物フィーバーの波をうまく乗りこなしたが、しかし、

29 いまさら自己啓発しても、間に合わないおそれが多分にあるしねえ。

30 うらやましい。廣野 (2013) 『サイエンティフィック・リテラシー』(丸善出版) の2024年の販売数は10部であった。絶版にはなっていない、いまだ購入してくださる方がいることの喜びが半分、情けなさが半分といったところです。

ブームの退潮とともに消え去る運命の一時的な幸せ者とのみ考えるとしたら、ウッドの真髓に触れ損なうだろう。ウッドは毎日、早起きし、朝4時半か5時から8時まで執筆。その後、3マイルのランニング——天候などものともせず——し、水風呂を浴びてから朝食をとり、さらに9時間ほどの執筆を続ける。1日の半分を執筆にあてる、ということは座り続ける生活のせい、生涯、消化不良に悩み続けたそうだ（アレン 1990, 127）。生涯にあらわした著作は60冊近く。博物学の講演会の講師として各地を訪れ、ブームが過ぎ去りつつある中でも、博物学の啓蒙活動を頑張り続け、最期はそうした旅の途上で幽明境を異にした。以下に、著作の一部を——ずらずら羅列して見づらくて恐縮だが——掲げる<sup>31</sup>。

『動物の生活、粗描と逸話 (*Sketches and Anecdotes of Animal Life.*)』(1856年、R)、  
『イギリスで普通に見られる生きものたち (*The Common Objects of the Country.*)』  
(1858年、R)、『ミツバチ、その習性・管理・扱い方 (*Bees: Their Habits, Management and Treatment.*)』(1860年、R)、  
『顕微鏡下で普通に見られる生きものたち (*The Common Objects of the Microscope.*)』(1861年、R)、  
『庭の友人たちと嫌われ者たち (*Our Garden Friends and Foes.*)』(1864年、Routledge, Warne and Routledge)、  
『聖書の動物たち (*Bible Animals.*)』(1869年、Longmans, Green, Reader and Dyer)、  
『外国の昆虫 (*Insects Abroad.*)』(1874年、L)、  
『人間と獣 現状そして今後 (*Man and Beast Here And Hereafter, 2 vols.*)』(1874年、D)、  
『野外生活 (*Out of Doors.*)』(1874年、L)、  
『イギリスの昆虫 (*Insects at Home.*)』(1876年、L)、  
『自然の教え (*Nature's Teachings: Human Invention Anticipated by Nature.*)』(1877年、D)、  
『小道と野原 (*Lane and Field.*)』(1879年、Society for the Promotion of Christian Knowledge)、  
『寒さに強い多年生植物と伝統的な花たち (*Hardy Perennials and Old Fashioned Flowers.*)』(1884年、L. Upcott Gill)、  
『みんなの博物学 (*Popular Natural History.*)』(1885年、Porter & Coates)、  
『聖書の動物たちの話 (*Story of the Bible Animals.*)』(1888年、Office of Charles Foster's Publications)、  
『ナチュラリ

31 次の出版社は略号で記した。R = George Routledge and Co.、L = Longmans, Green and Co.、D = Daldy, Isbister & Co. 残念ながら、邦訳は一冊もないようだ。

---

ストとの 30 分——岸辺をそぞろ歩く (*Half Hours with a Naturalist: Rambles Near the Shore.*)』(1889 年、Charles Burnet & Co.)

ネタがつきずに、よくも 60 冊、書き続けられたものだ。まさに、博物学の科学コミュニケーションに命を賭けた人生であった。

作中で、ホームズは『野外生活』を 3 ヶ所参照する。「ちょっと抜き読みしてみましよう。」(同,361)

「水泳者がもし黄茶色の薄膜と細根のようなやや丸みある塊状物、あたかも一握りのライオンのたてがみと銀紙のごときものを見たときは、十分な警戒を要す。これこそ恐るべき毒針を有するサイアネア・カピラータであるからだ (If the bather should see a loose roundish mass of tawny membranes and fibres, something like very large handfuls of lion's mane and silver paper, let him beware, for this is the fearful stinger, *Cyanea Capillata.*)」

「これに刺されたときは皮膚にまっ赤な線が多数生じるが、これを細かに点検すれば、微細な点、すなわち小膿疱の連続であることがわかる。この小膿疱の一つ一つは、あたかも赤熱した針にて刺されたごとく、激痛を伴う (The multitudinous threads caused light scarlet lines upon the skin which on closer examination resolved into minute dots or pustules, each dot charged as it were with a red-hot needle making its way through the nerves.)」

「胸部の激痛はあたかも銃弾に貫かれたように、私を打ち倒した。脈拍は止まり、つぎに心臓は六、七回大きく躍動して、胸部から噴出するかと思われた (Pangs shot through the chest, causing me to fall as if struck by a bullet. The pulsation would cease, and then the heart would give six or seven leaps as if it would force its way through the chest.)」

ドイルの原文も付けておいた (Conan Doyle 1926, 555)。『野外生活』には、「クラゲとその巻き毛」(136-145 頁) なるエッセイがあり、キタユウレイクラゲの話はそこに収められている。上記の「引用」に相当する文章は、以下である。

「水泳する人や海岸をぶらつく人がたまたま、波で水面まで投げ出されたり、岸に打ち上げられ黄茶色の薄膜と細根のようなやや丸みある塊状物、あたかも一握りのライオンのたてがみと銀紙のごときものを見たときは、十分な警戒を要す。好奇心を控えて、慎重にできるだけ遠ざかるとよい。これこそ恐るべき毒針を有するサイアネア・カピラータであるからだ (If the bather or shore wanderer should happen to see, either tossing upon the waves or thrown upon the beach, a loose, roundish mass of tawny membranes and fibres, something like a very large handful of lion's mane and silver paper, let him beware of the object, and, sacrificing curiosity to discretion, give it as wide a berth as possible. For this is the fearful stinger, scientifically called *Cyanea capillata*, the most plentiful and the most redoubtable of our venomous medusae.)」

「多数の糸のひとつが皮膚に触れた場所には必ず、赤味がかった線が生じるが、これを細かに点検すれば、微細な点、すなわち小膿疱の連続であることがわかる。この小膿疱の一つ一つは、あたかも赤熱した針にて刺されたごとく、感覚が神経まで達する。(Wherever one of the multitudinous threads had come in contact with the skin there appeared a light scarlet line, which on closer examination was resolvable into minute dots or pustules, and the sensation was much as if each dot were charged with a red-hot needle gradually making its way through the nerves.)」

「呼吸と心臓の動きの両方が影響を受け、短い間隔で胸に鋭い痛みが走り、あたかも銃弾に心臓と肺を貫かれたように、鉛のミサイルに撃たれたかのように、私を打ち倒した。その後、脈拍は永劫と思えるほどの長い間止まり、つぎに心臓は六、七回大きく躍動して、胸部から噴出するかと思われた。その後、肺は動かなくなり、まるで絞首者の腕が首に巻き付いているかのように、私は

息も絶え絶えに立っていた。その後、鋭い痛みが胸を駆け抜けるといった過程が繰り返されていった。(Both the respiration and the action of the heart became affected, while at short intervals sharp pangs shot through the chest, as if a bullet had passed through heart and lungs, causing me to fall as if struck by a leaden missile. Then the pulsation of the heart would cease for a time that seemed an age, and then it would give six or seven leaps, as if it would force its way through the chest. Then the lungs would refuse to act, and I stood gasping in vain for breath, as if the arm of a garotter were round my neck. Then the sharp pang would shoot through my chest, and so da capo. )」

紙数と文学的効果を勘案した上でのドイルの判断なのだろうが、ホームズはけっこう「端折っている」。研究者がかような「引用」を行ったら、研究倫理違反として指弾されるにちがいない。だがしかし、私たちのこうした倫理は、どのくらい時代を遡れるのだろうか。歴史研究の対象として狙いを定めた思想家が、何か引用をしていたとする。当時の人々は、私たちと引用の倫理を共有していず、ドイルのような引用をしていたかもしれない。それがその当時の引用なのである。だが、私たちの枠組みを前提に、引用を素朴に信じたとしたら、今日の研究ゲームでは足をすくわれてしまう。自らの枠組みを自覚化し、相対化できることも研究の黄金律の一つだろう。

先にも述べたが、「ライオンのたてがみ」というタイトルは絶妙である。発表された当時（1926年）、かの博物学ブームが続いていて、多くの人がウッドを読んでいたとしたら、ただちにネタがばれてしまう。1854年生まれのホームズが十代で読んだとして、『野外生活』は一世紀弱前の書籍になる。大多数の人はそもそも本を読まない。本を読む人の多くは現在旬な流行本を紐解くの忙しい。ホームズによれば、「つまらない知識をうんと持っていて、科学的には少しも系統だっていないけれども、仕事の上の必要に応じてそれがずいぶん役に立つ。」(同上) つまらない知識を得るために、1世紀弱前の本に目を通していったとしたら、ホームズ——ということは、ドイル——も博物学を好んで

いたか、探偵術に役立つという予感のもとで、読みあさっていた可能性が思い浮かぶ。マクファースンが「ライオンのたてがみ」というダイニング・メッセージを残した理由は、知識はなかったが、ライオンのたてがみに見えたからそう言った、ということではないだろう。なんと言っても、マクファースンは理科の教師だったのだ。英名ライオンノタテガミクラゲを知っていたとしても不思議はない。ダーウィンを読んでいると、よく考えているなあと感心することしきりだが、ドイルも負けず劣らず、「ライオンのたてがみ」というダイニング・メッセージを残す人物の属性についてよく考えている。研究の第二の黄金律は、とにかくよく考えることだろう。

クラゲ以外にも、ホームズ譚にはいろいろな動物が登場する。たとえば、1890年9月に起こった「白銀号事件」(第13短編)には、名競走馬の白銀号、そして栗毛(ベイヤード)号、デズボロー号、拳闘家号、アイリス号、ラスパー号、そして、怪しい人物に厩舎番がけしかける無名の犬が「出演」している。1883年4月の出来事が綴られる「まだらの紐」(第8短編)は、インドで開業していた医師グリムズビー・ロイロット博士と、妻の連れ子ヘレン・ストーナーをめぐる事件だが、3種の動物が出てくる。ヘレンによれば、「父はインドの動物をたいへんかわいがりまして、手紙をやってはるばる取りよせるのでございますが、ただいまもインドで鹿狩りに使います豹が一頭と狒々が一匹おります。」(ドイル 1953a, 271)<sup>32</sup>そして、例のヘビ。イヌもよく出てくる。バスカヴィ

32 原文は本稿30頁に掲載。あれ、「鹿狩りに使います豹」って、チーターのことなの。確かに、インドの貴族たちはチーターを飼い慣らして、鹿狩りに使いました。しかし、ヒョウ (*Panthera pardus*) とチーター (*Acinonyx jubatus*) は属レベルで異なる。リンネは『自然の体系』(第10版)にネコ属 (*Felis*) として、ライオン (*F. leo*)・トラ (*F. tigris*)・ヒョウ (*F. pardus*)・ジャガー (*F. onca*)・オセロット (*F. pardalis*)・ネコ (*F. catus*)・オオヤマネコ (*F. Lynx*) の7種を記載した。その後、ネコ属の仲間が増えていった。1775年、ドイツの博物学者・動物学者シュレーバー (Johann Christian Daniel von Schreber 1739-1810) によって記載されたチーターもその一つである (そのときの学名は *F. jubata*)。ネコ属が増えていくに従い、相違点も見取れるようになり、ドイツの博物学者・自然哲学者オーケン (Lorenz Oken 1779-1851) は、1816年、ライオン・トラ・ヒョウ・ジャガーをヒョウ属 (*Pathera*) として「独立」させた (Oken 1816)。1828年、イギリスの解剖学者ブルックス (Joshua Brookes 1761-1833) は新属を設定し、学名 *Acinonyx Venator* なるネコ科生物を記載したが、これはチーターと同じであったので、命名規約によって、チーターの学名は

ル家の犬、トビー、ポンポン、ロイ、ブラニガン、エヤデル・テリヤ種、ポメラニア種、フレンチ・ブルドッグ種等々。その他、ガチョウ・ライオン・オオトカゲもあげることができる。

相棒ワトソンは、1888年時点のホームズの知識範囲を次のようにまとめる（ドイル 2006, 30-31）。

1. 文学の知識 —— 皆無。
2. 哲学の知識 —— 皆無。
3. 天文学の知識 —— 皆無。
4. 政治学の知識 —— 貧弱。
5. 植物学の知識 —— さまざま。ベラドンナ、阿片、毒草全般には詳しい。実用的園芸に関しては知識がない。
6. 地理の知識 —— 実用的だが範囲が狭い。土壌を一目見ただけで違いを言いあてられる。散歩のあと、ズボンについた泥はねを私に見せて、色と堅さでロンドンのどの場所の泥か私に説明した。
7. 化学の知識 —— 深い。
8. 解剖学の知識 —— 正確だが体系的でない。
9. 異常な事件記録の知識 —— 膨大。彼は今世紀に起きた惨事の詳細をすべて知っているようだ。
10. バイオリンを上手に弾く。
11. 熟練の木刀選手、ボクサー、剣士。
12. イギリス法について極めて実用的な知識を保有。

ホームズ譚には動物が活躍することに思いを致すと、上記のリストは当然、

---

やっとなら *Acinonyx jubatus* に落ち着いたのである。延原謙（1892-1977）は、当時の人々はチーターといってもピンと来ないだろうからと気を利かせて、「鹿狩りに使います豹」と訳したのだろう。1953年前後は、大型のネコ科生物は一般には一律に豹の仲間と看做されていたことが推測できる、興味深い訳文である。1990年前後、延原展（謙の姪成井やさ子の息子で、謙の養子）によって訳文がアップ・トゥー・デートされたが、訳文はチーターに変更されず、元のまま残った。

あるタウマゼインに私たちを誘う。動物の項目がないのは、なぜ?! 哲学の端緒はタウマゼイン（驚き）にある。「不思議に思うこと（タウマゼイン）は、知恵を愛する者に固有の経験だからだ。というのも、これ以外に知恵を愛することの始まりはない……。」（プラトン 2019a, 155d）「驚異することによって人間は、今日でもそうであるがああの場合にもあのように、知恵を愛求し（哲学し）始めたのである。」（アリストテレス 1959, 982b）タウマゼインとは、当然のものとみなしていた事柄が、実は当然でもなんでもないという感覚に襲われ、改めて謎として立ち現れ、説明をつけたい、説明をつけなければならないという衝動に駆られる体験のことを指すのだろう。研究は謎＝疑問（なぜだろう、なぜかしら）とともに始まると言い換えてもよい。

歴史学でも同様である。日本の戦国時代史を専攻する小和田哲男は、近世掛川城の調査整備委員会のメンバーであり、発掘調査に立ち会った折り、驚きを味わった。「そのときの驚きと云ったらよいか、ショックはいまでも鮮明に思い出す。」（小和田 2003, 19）本丸が中世の墓地のうえに築かれていたからである。私たちの感覚からすると、かつての墓地の上で日々の暮らしを送ることは、何となく落ち着かない。「ふつう、このような場合、墓地をどこかに移すかするのではないだろうか。……祟りがあるなどということは考えなかったのだろうか。（改行）その光景から私の一つの研究が生まれた。つまり、そのときの驚きと、驚きとともに生じた疑問が研究のステップになったのである。」（同, 20）<sup>33</sup>

もとい。「白銀号事件」について、今少し、よしなし事を。グレゴリー警部とホームズの次のやりとりに、いささか注意を払うことにしよう。やりとりに出てくるロス大佐は白銀号の所有者である。

「……グレゴリーさん、羊のなかに妙な病気が流行しているのは、大いにご注意なすったらよいと思いますよ。じゃ御者君、やってください」ロ

33 小和田は最終的に民俗学のいう「けがれの逆転」に辿り着くのだが、本筋からそれすぎるくらいがするので、割愛する。

ス大佐は依然として、ホームズを軽蔑するらしい顔をしていたが、警部のほうは、いたく注意を喚起させられたらしかった。「あなたはそれを重大視されますか?」「きわめて重大視します」「そのほか何か、私の注意すべきことはないでしょうか?」「あの晩の、犬の不思議な行動に、ご注意くださいといいでしょう」「犬は全然なにもしなかったはずですよ」「そこが不思議な行動だと申すのです」(ドイル 1953b, 45-46)

ウマが盗まれたとき、凡百の人々は、ウマがどう盗まれたかなどをあれこれと思案する。一方、ホームズはこう考える。

あの晩犬が騒がなかったという重大な事実には思い到りました。(改行)……私は、厩舎に犬の飼ってあることを知りましたが、夜中に何ものかが厩舎にはいって馬をつれ出したのに、犬がほえなかった——少なくとも二階に寝ている二人の若ものの目をさますほどには、ほえなかったという事実には思い到りました。これは馬をつれ出したものが、犬のよく知っている人物であることを明らかに示すものです。(改行)そこで私は、真夜中に厩舎へ行って白銀号をつれだしたのは、ジョン・ストレーカーだと断じました。断じてよいと思いました。(同, 54)

顔見知りの最たる者は調教師だろう。調教師ジョン・ストレーカーが馬主を欺き、ウマを連れ去ったのではあるまいか——と、犬の吠えなかったという、行動が生じないこと、つまり「非在」から、想像力=創造力が発揮される。法学者であり、ミステリーものし、また、ミステリー評論で成果をあげた——エドガー特別賞、MWA 最優秀評伝・評論賞を受賞——ネヴィンズ (Francis Michael Nevins, Jr. 1943 年生) は、これを negative clue (定訳はないが、仮に「非在手がかり」と——こなれない言葉で恐縮だが——訳しておく)と呼んだ<sup>34</sup>。非在手がかりの名手として知られたのはクイーン (Ellery Queen 1905-1971/1982)

34 エラリー・クイーン研究家の飯城勇三は、「負の手がかり」と訳している (ネヴィンズ 2016, 35;162;264;378)。

であり<sup>35</sup>、ネヴィンズはクイーンのオーソリティであった。ネヴィンズが、この（マイナーな）術語を鑄造したのは、さもありなん。

「私はチャンドラーが好き」は正しい日本語だが、「好きチャンドラー私」は正しい日本語ではない。文法という規則違反だからだ。「私はチャンドラーが好きだ」「私は志ん朝が好きだ」「私はヒトラーが好きだ」はすべて文法的には正しい日本語だが、最後者は発言するのが憚れる。ある時代のある場所においては、文法的に正しい発話がすべて等し並みにこの世に現れるわけではない。発話の文法、発話の規範といったものが存在する。ある時代のある場所の人々をある発話に誘い、あるいは、ある発話を許し、ある発話は抑制し、ある発話を隠蔽する「構造」を、フーコー（Michel Foucault 1926-1984）を猿まねして、エピステーメーなどと呼んでおこう。

現に存在する発話を集めただけでは、エピステーメーを、したがって時代精神を把握できない。隠蔽されている発話にも、思いが及ばなければならない。思想史研究で威力を発揮するこの作業を人はなかなかできない。現にそこにあるものを認めることは比較的（←この限定は重要）たやすいが、ないものを、ありうべきはずなのにないものとして見てとることは、けっこう想像力が要求される営みだからだ。「不在」からの創造力を必要とするとも言えるだろう。ホームズに限らず、古今東西の名探偵たちは、このような能力に秀でていと設定されている。非在手がかりからエピステーメー総体を把握できるようになると、思想史研究の幅もぐっと広がる。

もとい。今度は、「まだらの紐」について、今少し、よしなし事を。インドのお猿さんですぐに私が思い起こすのは、ハヌマン神にちなむハヌマンラングール (*Semnopithecus entellus*) になる。ハヌマンラングールは、1頭もしくは少数のオスと、数十頭のメス、そして子供からなる群れを形成する。外部か

35 生没年の表記が、トリッキーで恐縮である。周知のように、エラリー・クイーンは、イトコ同士であった Daniel Nathan (1905-1982) と Manford Emanuel Lepofsky (1905-1971) の合作用ペンネームなので、このように記しました。それぞれが単独で活動するときのペンネームは、Frederic Dannay と Manfred Bennington Lee です。ちなみに、児童期のルパンものなどを除き、私が最初に読んだ本格的推理小説はドルリー・レーン四部作です。

ら侵入したオスによって群れが乗っ取られると、子殺しが始まる。子供がいると、メスは発情せず、せっかく乗っ取っても、自分の子供を残せないからだ。ヒト以外の霊長類で子殺しが発見されたはじめての例として有名だ。

オナガザル科 (Cercopithecidae) コロボス族 (Colobini) のハヌマンラングール属 (*Semnopithecus*)・ラングール属 (*Trachypithecus*)・リーフモンキー属 (*Presbytis*) は、英語ではラングール (langur) と呼ばれる。同じオナガザル科でも、ヒヒ (baboon) はマカク属 (*Macaca*) を除いたヒヒ族 (Papionini) に対して用いる。ヒヒはアフリカに分布する。あれ、ホームズの頃はヒヒがインドに分布していたのか？ 原文の確認は研究のイロハ。そこで、ヘレンさんの言葉を確認すると、” He has a passion also for Indian animals, which are sent over to him by a correspondent, and he has at this moment a cheetah and a baboon.” (Conan Doyle 1892a, 154) 確かにヒヒですねえ。変だなあ？

先に記したように、「まだらの紐」には、ロイロット博士とヘレンしか出てこない。

実は、ホームズが、あるいは、ワトソンやヘレンが犯人であったとか、「ライオンのたてがみ」パターンで事故であった、という奇手もありえなくはないが、まあ、犯人はロイロット博士しかありえない。「まだらの紐」の要諦は、だれが犯人か (フーダニット = whodunit = Who [has] done it?) ではなく、犯行がいかにしてなされたか (ハウダニット = howdunit = How done it?) にある。

犯行はこのようにしてなされた。ロイロット博士が、「牛乳を使って、口笛で呼ばばもどってくるように蛇を慣らしたにちがいない。」(ドイル 1953a, 304) 多くの指摘を呼び込んだ想定だが、繰り返しを厭わず述べておくと、これまでのところ、牛乳を飲むへビは知られていない。変だなあ？ イヌなどのコンパニオン・アニマルと違って、へビは基本的に人になつくことはない(慣れることはある)。変だなあ？ 芸を仕込むこともできない。インドのへビの大道芸は、へビの自然な行動、条件反射などを利用して、芸のように見せているにすぎない。変だなあ？ へビは外耳がなく、空気の振動を音として直接感知することはできない。インドのへビの大道芸で笛が吹かれるが、あれは笛を動かすことによる視覚刺激を与えるためである。変だなあ？

「沼毒蛇だ。インドで最も恐るべき毒蛇なんだ。博士は咬まれてから十秒以内に死んでいる。」(同 303) 原文を確認しておくとして、”It’s a swamp adder!” cried Holmes; “the deadliest snake in India. He has died within ten seconds of being bitten.” (Conan Doyle 1892a, 145) 標準英名 swamp adder に対する学名は *Proatheris superciliaris*。これには標準和名が存在しません。こいつは東アフリカに棲息する。インドに棲息していれば帰国時に持ち帰ることができるので自然だが、東アフリカだと、わざわざ輸入しなければならない。まあ、これはありえなくもないか。台湾にはヒヤッポダ(百歩蛇、*Deinagkistrodon acutus*)がいる。噛まれたら百歩も歩かないうちに死ぬと言われていることに基づく命名であり、確かに猛毒である。確かにこうしたヘビもいるが、咬まれてから十秒以内に人が死ぬような毒をもつヘビは知られていない。変だなあ？

このように、「まだらの紐」は「変だなあ？」のオンパレードである。これはホイッグ史観のもとで現在から過去を裁断する進歩史観的傲慢ではなく、おそらく、当時における博物学的知識からみても、「変だなあ？」だったはずだ。晩年の「ライオンのたてがみ」は、博物学的知識に則り、それを利用して、話が構築されていた。初期の「まだらの紐」は、話が構築されたあとで、おそらく、人々のもっているであろう素朴なヘビ観に見合う形で架空の生物が想定され、プロットに当てはめられている。

素朴な科学コミュニケーション論からすると、「ライオンのたてがみ」は人々に「適切な」知識を与える良き科学コミュニケーションであり、「まだらの紐」は人々に似非知識を与える悪しき科学コミュニケーションだ、ということになるだろう。この落差はいったい何なのだ?! 推理小説だと、ここで読者への挑戦が突きつけられる。<必要だろうと思われる情報はすべて述べてあるはずですが。1883年4月の時点では、動物に関するホームズの知識はハチャメチャだったが、1909年7~8月には実に正確な知識をもつようになっているのは、なぜか? 1881年にリストアップされたホームズの知識一覧に、動物の項目がないのは、なぜか? さあ、当ててみてください。>

また、ちょっと脱線。高校時代、国語の教科書に、なだいなだ(1929-2013)

の『人間、非人間的なもの』が載っていた。そこで読んだ、ユクスキュル (Jakob Johann Baron von Uexkull 1864-1944) のダニの話がたいそう興味深く、こうした研究をしたいものだと考え、東京大学の理科Ⅱ類に入学した——という話はすでにいくつかの機会に開陳した。『人間、非人間的なもの』もついでに読んでみたら、初めの方にこんなことが書いてあった。「私は、自分のまわりの人間が、全部右へ行ってしまえば、地面が傾いてしまいそうな感じがして、それに釣合うように、自分だけは左に、しかも十人が一步右へ一人の私は十歩、左に行かなければいけないような気がするのです。」(なだ 1972, 4) 卒業研究をご指導いただいた村上陽一郎先生も同様なことを述べている。「みんながみんな、わあっとそちらへ付いていこうとすることについては、いつも、そこからはとにかく距離を置きましょうという思いがあって、これはむしろ私の悪いところかもしれない。」(村上 2025, 54) その村上先生に教えられた言葉で、今も心に残るものの一つに、*fesitina lente* がある。「ゆっくり急げ！」ウッド師は、「急いで急いでいる」ようにしか見えない。ウッド師同様、人生の大半の時間を執筆に捧げられれば、それはそれでけっこうな話だが、できなかったからといって、そう落ち込む必要もない。バランスをとるため、木村武二先生 (1935-2019) についてもちょこっとだけ言及しておきたい。

院生時代、行動・生態学グループの教授は木村先生、助教授は松本先生、助手は嶋田正和先生であった。木村さんは悠揚迫らぬ、「ゆっくり急げ！」の達人であった。もちろん、私たちはいい研究をすることを求められた。が、それは成果主義とはかけ離れていた。木村さんが直接そのような言葉を発したわけではないが、行動をもって示して下さったのは、「人生を楽しみ、研究を楽しむ」——私は木村イズムと呼んでいる——姿勢である。人生を楽しみ、研究を楽しめば、自ずと結果がついてくる。汲々として成果のみを追い求める余裕のなさが、研究を貧しくし、楽しむ余力が研究を豊かにする——単なる楽観かもしれないが、それほどまちがいでないだろう。研究の黄金律で、もっとも大事なのはこれであろう。みなさん、私の「挑戦」を楽しんでいただけていますか。

ベアリング＝グールドは、『野外生活』に次のような注釈を与えている。

実用博物史書きおろし選集(ロングマンズ・グリーン刊、一八七四年初版、一八八二年と一八九〇年に改訂)。ジョン・ジョージ・ウッド牧師(一八二七～九二)は、本書以外にも六十冊近い著書があり、雑誌にも多数の寄稿を残した。その多くは子供向けである。師はさらに、『蜂——その習性と社会組織』(ロンドンのG・ルートレッジ刊、一八五三年)も著してホームズが一九〇四年から一九一二年にかけてかなり熱中した相手が蜂であることも考え合わせると、師がホームズに与えた影響は従来認められていたより大きいものと思われる。(ベアリング＝グールド 1987, 375-376)

だとすると、以前は漠然としたイメージという(似非)知識しか持っていなかったのだが、ロイヤル・ゼリーに興味を持ち、ミツバチについて調べる途上で、ウッド師の『蜂』も参照し、その後、ウッドによる多くの博物学啓蒙書を乱読し、動物に関する適切な知識を順次増やしていった、と考えることが可能になる。

ワトソンによるホームズの知識のリスト化を統べる「プチ・エピステーマー」は、探偵術に役立つ実践的な知識/そうでない知識という「あれかこれか」的分割法であるように思われる。化学・解剖学・犯罪記録・イギリス法はまると前者に、文学・哲学に関する知識はまると後者に投げ込まれる。植物に関する知識は、毒草についてのそれとそれ以外に分割され、地理に関する知識は、(犯罪捜査が行われる可能性の高い) 土壌についてのそれとそれ以外に分割され、各カテゴリーに放り込まれる。

「まだらの紐」事件の捜査が成功裏に終わったのは、ヘビを操っているとするロイロット博士の誤解にもかかわらず、ヘビの内発的な行動がロイロット博士の期待に沿うものであったからにほかならない。毒蛇を操った意図的殺人というロイロット博士およびホームズ流の「誤」解釈であれ、博物学的知識に基づく、解き放たれた毒蛇は自身が人を襲いたくなれば襲うという「適切な」解釈であれ、毒蛇はある場合には人を襲い、そして咬まれ毒が体内にまわった人

は死ぬ場合があるという素朴でありふれた事態さえ成り立てば、話は破綻せず、収束する。似非知識でも、事件が解決できる！ そして、「変だなあ？」満載でも名作と讃えられ続ける。

物語は虚実のあわいの均衡の上に成り立つ。どちらに振れすぎても、危うくなる。芭蕉（1644/45-1694）は許六（1656-1715）に説く——「名人は、危うきに遊ぶ」と（『俳諧問答』岩波文庫、1954年）。「まだらの紐」が名作なのは、危うきに遊んでいるからなのかもしれない。「あれかこれか」的二分法から、どこかはみ出す。動物に関する知識は「あれかこれか」的二分法を食い破りかねない。動物なる項目は、ワトソンの「あれかこれか」的な「プチ・エピステーマー」において、「プチ・エピステーマー」の地盤を崩壊させる「裂け目」、蟻の一穴なのかもしれない。

なぜ私は研究者になったのだろうか。たいそうお世話になった大先輩、オートポイエーシス論で高名な河本英夫さんによれば、男が学問する理由は、畢竟、二つだそうである。女性にもてたいか、他の男を支配したいか、だ。う～ん、どちらも私が研究の世界に落ち込んだ理由ではないなあ。高校時代、物理を学んでいても、数学を学んでいても、他の人が気にもとめない箇所が引っかかってしまう。気になって、しかたない。質点って何だ？ 大きさがゼロで質量だけがあるだなんて、おかしいじゃないか。おかしい想定から、現実が実に見事に説明できてしまうなんて、煙に巻かれた気分だ。もっと納得したい。普通の人が気にとめないところが気になって仕方がない。木村先生から、「おじさんは、＜哲学者＞だからなあ」と揶揄された<sup>36</sup>。あれこれ調べる。それでも分からない。自分で探求するしかない——のか。こんなあたりが、原因だったのだろう。

研究者になった要因がもう一つありそうだ。母によると、小学校低学年のころ、母と同じ布団にくるまりながら、涙目で「人はなんで死んじゃうの」と訊いたことがあるという。母の「なんでかねえ、死にたくないねえ」という答えになっていない答えは、今でも覚えている。哲学とは死の練習なのだという（ブ

36 木村さんは、男性院生を「おじさん」と呼ぶことがあった。もちろん、この＜哲学者＞は真正の哲学者のことではない。

ラトン 2019b,67E)。哲学、知への愛とは、いわば純粹思惟に近づくことである。死によって肉体の軛から逃れ、魂となり、真の純粹思惟ができるようになる。だから、哲学は死の練習であり、なんらおそるべきことではない<sup>37</sup>。そうなのかもしれない。いずれ死ななければならぬ。哲学で死の練習をするのもいいのかも。

私が直観的に思い浮かんだ、第二の対案は、所詮、死ぬのが運命（さだめ）のわが身なら、死ぬ身として暮らすことになったこの現世（うつしよ）を隈なく見てとっておこうとする意志を持ち続けるという、論理的に考えれば、対抗策になっていない対処法であった。奇しくも、大学生時代、小田実の『何でも見てやろう』が文庫に入った。鼓舞された。ただし、小田の〈何でも〉の中心軸は、海外の人間社会であったが、私は動物世界に向かった。

ユクスキュル開眼後、しかし予定に反して、廣松渉（1933-1994）・大森荘蔵（1921-1997）両先生の講義の面白さに魅せられて、そして導かれて、哲学書・哲学文献を乱読する生活を送ることになった。廣松先生の理科生向け〈哲学概論〉の講義は、私が気になって仕方がないが、手を拱くばかりであった停滞から抜け出す導きの糸であった。まったく訳の分からず、歯が立たなかった哲学文献が、そのうちなんとはなしに分かるようになっていく経験は、これまた、心地よかった。さて、死への対抗策のあいだで、あるいは、二つの楽しみのあいだで、どちらを選ぶか。哲学か、生物学か、それが問題だ<sup>38</sup>。〈世界の積然としなさ〉に得心を与えてくれそうな哲学か、クワガタムシなど、目の前にある堅固な存在者で〈世界の手触り〉を与えてくれそうな生物学か。人生の選択は、「あれかこれか」でやるしかない。同時にはできない。では、さしあたり……。大学院では昆虫を対象にした進化生態学を専攻することにした<sup>39</sup>。

37 納富先生、いい加減なことをいって、ごめんなさい。ギリシャ哲学を専攻するかたがた、いい加減なことをいって、ごめんなさい。

38 今から振り返ると、結局どちらも選べず、どっちつかずの「鳥なき里なき蝙蝠」で終わってしまった。名人は危うき所で遊ぶが、危うき所で遊んでも名人にはなれないということですね。

39 ウッド師は、キタユレイクラゲの被害を物語る際、「ダ・カーポ」なる言葉をうまく使っていたなあ。だとすると、フィーネはどこだろう。さて、ここまでよしなしごとをご「静聴＝静読？＝精読？」いただいたみなさま、どうもありがとうございました。サンキュー。では、チャオ！あるいは、アデュー。

## 文献

- アレン、D. E. (1990)『ナチュラリストの誕生 —— イギリス博物学の社会史』阿部治訳、平凡社。David Elliston Allen (1976) *The Naturalist in Britain: A Social History*. Penguin Books.
- アリストテレス (1959)『形而上学』出隆訳、岩波書店 (岩波文庫)。
- バーバー、リン (1995)『博物学の黄金時代』高山宏訳、国書刊行会。Lynn Barber (1980) *The Heyday of Natural History, 1820-1870*. Janathan Cape.
- ベアリング＝グールド、W. S. (1987)『シャーロック・ホームズ —— ガス燈に浮かぶその生涯』小林司・東山あかね訳、河出書房新社 (河出文庫) = (1977) 講談社。William Stuart Baring-Gould (1962) *Sherlock Holmes of Baker Street: A Life of the World's First Consulting Detective*. Ruppert Hart-Davis.
- ボウルズ、エドモンド・ブレア (2006)『氷河期の「発見」 -- 地球の歴史を解明した詩人・教師・政治家』中村正明訳、扶桑社。Edmund Blair Bolles (1999) *The Ice Finders: How a Poet, a Professor, and a Politician Discovered the Ice Age*. Counterpoint.
- Brookes, J. (1828) "Section Carnivora". A catalogue of the Anatomical and Zoological Museum of Joshua Brookes. Richard Taylor.
- コナン・ドイル、アーサー (1953a)「まだらの紐」『シャーロック・ホームズの冒険』延原謙訳、新潮社 (新潮文庫)、264-305。Arthur Conan Doyle (1892a) *The Adventure of the Speckled Band*. *The Strand Magazine*, 3(14): 142-157.
- コナン・ドイル、アーサー (1953b)「白銀号事件」『シャーロック・ホームズの思い出』延原謙訳、新潮社 (新潮文庫)、7-59。Arthur Conan Doyle (1892b) *The Adventure of SILVER BLAZE*. *The Strand Magazine*, 4(24): 645-660.
- コナン・ドイル、アーサー (1953c)「最後の挨拶」『シャーロック・ホームズ最後の挨拶』延原謙訳、新潮社 (新潮文庫)、328-360。Arthur Conan Doyle (1917) *His Last Bow*. *The Strand Magazine*, 54(321):227-236.
- コナン・ドイル、アーサー (1953d)「ライオンのたてがみ」『シャーロック・ホームズの事件簿』延原謙訳、新潮社 (新潮文庫)、329-365。Arthur Conan Doyle (1926) *The Lion's Mane*. *The Strand Magazine*, 72: 545-556.

- コナン・ドイル、アーサー (2006) 『緋色の研究 (新版)』阿部知二訳、創元社 (創元推理文庫)。Arthur Conan Doyle (1887) *A Study in Scarlet*. Ward Lock & Co.
- Emerson, A.E. (1933) A revision of the genera of fossil and Recent Termopsinae (Isoptera). *University of California Publications in Entomology*, 6(6), 165-195.
- Esaki, T. (1956) Notes on *Hodotermopsis japonica* Holmgren (Isoptera, Hodotermopsidae), *Bulletin of the National Science Museum* (Tokyo) 39:86-89.
- Fujiyama, I. (1983) Neogene termites from northeastern districts of Japan, with references to the occurrence of fossil insects in the districts. *Memoirs of the National Science Museum*, 16: 83-98. 藤山家徳 (1983) 「東北地方の新第三紀シロアリ化石 付 . 同地方の昆虫化石の産状」『国立科学博物館専報』16: 83-98。
- 廣野喜幸 (1985) 『オオシロアリ *Hodotermopsis japonica* Holmgren の生殖カーストの発生様式についての研究』(東京大学大学院理学系研究科1984年度提出修士論文)。
- Hirono, Yoshiyuki (1990) Histological and ecological studies on the caste differentiation of the Japanese damp-wood termite *Hodotermopsis japonica*. Ph. D. thesis(The University of Tokyo).
- Holmgren, N.F. (1911) Termitenstudien. 2. Systematik der Termiten. Die Familien Mastotermitidae, Protermitidae und Mesotermitidae. *Kungliga Svenska Vetenskaps-Akademiens Handlingar*, 46(6): 1-86.
- Holmgren, N. F. (1912) Termiten Japans. *Annationes Zoologicae Japonenses*, 8:107-136.
- 黄复生・季桂祥・朱世模 [編] (1989) 『中国白蟻分類及生物学』北京天則出版社。
- 黄复生・朱世模ほか [編] (2000) 『中国動物志 昆虫綱第17卷 等翅目』科学出版社。
- 香川知晶・小松美彦 [編] (2014) 『生命倫理の源流 —— 戦後日本社会とバイオエシックス』岩波書店。
- 岸上鎌吉 (1901) 「ゆふれいくらげ (第二版)」『動物学雑誌』3: 93-95。
- 小松茂美 (2012) 『遺稿 後白河法皇史 [未完]』学藝書院。
- 小松茂美 [編]・前田多美子 [補訂] (2012a) 『後白河法皇日録』学藝書院。

- 小松茂美 [編]・前田多美子 [補訂] (2012b) 『後白河法皇日録：別冊』学藝書院。  
コニコヴァ、マリア (2016) 『シャーロック・ホームズの思考術』日暮雅通訳、  
早川書房 (ハヤカワ文庫 NF)。Maria Konnikova (2013) *Mastermind: How to  
Think Like Sherlock Holmes*, Penguin Publishing Group.
- 増川宏一 (1995) 『碁打ち・将棋指しの誕生』平凡社 (ライブラリー) = (1987)  
『遊芸師の誕生——碁打ち・将棋指しの中世史』平凡社。
- 松本忠夫・広野喜幸・王家駟 (1990) 日本および中国のオオシロアリ属  
(*Hodotermopsis*) に関する最近の研究—地理的分布を中心として—、『し  
ろあり』80: 3-12。
- 松永俊男 (1992) 『博物学の欲望——リンネと時代精神』講談社 (現代新書)。  
村上陽一郎 (2025) 「あらためて自分の学問を振り返る (インタビュー)」、柿原泰・  
加藤茂生・萩原優騎 [編] 『村上陽一郎の <科学・技術と社会> 論』新曜  
社、11-80。
- なだいなだ (1972) 『人間、この非人間的なもの』筑摩書房 = (1985) ちくま文庫。  
ネヴィンズ、フランシス・M (2016) 『エラリー・クイーン 推理の芸術』飯  
城勇三訳、国書刊行会。Francis M. Nevins (2013) *Ellery Queen: The Art of  
Detection: The story of how two fractious cousins reshaped the modern detective  
novel*. Perfect Crime Books.
- ニコルズ、スティーブ (2024) 『虫・全史』熊谷玲実訳、日経ナショナルジオ  
グラフィック。Steve Nicholls (2023) *Alien Worlds: How insects conquered the  
Earth and why their fate will determine our future*. Apollo.
- 西村三郎 (1999) 『文明の中の博物学——西欧と日本 (上)』紀伊國屋書店。  
オブライエン、J (2021) 『科学探偵 シャーロック・ホームズ』日暮雅通訳、  
東京化学同人。O' brien, James F. *The Scientific Sherlock Holmes: Cracking  
the Case with Science and Forensics*. Oxford University Press.
- 小田実 (1979) 『何でも見てやろう』講談社 (文庫) = (1961) 河出書房新社。  
Oken, L. (1816) *Lehrbuch der Naturgeschichte*. vol. 3, ser. 2.
- 太田隆 (2011) 『シャーロック・ホームズの経済学』青弓社。
- 小和田哲男 (2003) 『歴史探索入門——史跡・文書の新発見』角川書店。  
プラトン (2019a) 『テアイテトス』渡辺邦夫訳、光文社 (古典新訳文庫)。  
プラトン (2019b) 『パイドン——魂について』納富信留訳、光文社 (古典新

訳文庫)。

Ruse, Michael (1974) *The Darwin Industry ? A Critical Evaluation. History of Science* 12(1): 43-58.

Schreber, J. C. D. (1775) *Die Säugetiere in Abbildungen nach der Natur mit Beschreibungen*. 3:312.

シービオク、トマス・アルバート & ドナ・ジャン・ユミカー = シービオク (1994)

『シャーロック・ホームズの記号論 --C.S. パースとホームズの比較研究』  
(富山太佳夫訳、岩波同時代ライブラリー) = 岩波現代選書、1981年。

Sebeok, Thomas A. and Jean Umiker-Sebeok (1980) *You Know My Method: A Juxtaposition of Charles S. Pierce and Sherlock Holmes*. Gaslight Publications.

スマイルズ、サミュエル (1981) 『西国立志編』中村正直訳、講談社 (学術文庫)。

Samuel Smiles (1859) *Self-Help*. John Murray.

Takematsu, Y. (1996) *A taxonomic revision of the Japanese termites from a chemical approach by the cuticular hydrocarbon analysis (Isoptera)*. (九州大学大学院 1995年度提出博士論文)

玉木存 (1998) 『動物学者 箕作佳吉とその時代 —— 明治人は何を考えたか』  
三一書房。

内井惣七 (1988) 『シャーロック・ホームズの推理学』講談社 (現代新書)。

吉村克己 (2008) 『満身これ学究 —— 古筆学の創始者、小松茂美の闘い』文  
藝春秋。